

元照における諸種の往生行

——信願行三法具足説を中心に——

吉 水 岳 彦

一 問題の所在

靈芝元照律師（一〇四八—一一一六年）は、宋代に南山律宗を復興し、浄土教者としても著名である。元照の浄土教思想は、元来研鑽を積んでいた戒律の研究の上に、天台、華嚴、禅等の影響を受けて形成されたものである。

元照は、持戒の目的を解脱と捉える一方で、持戒によって往生浄土が得られるとも言及している。⁽¹⁾これに関して、先学は、元照「義天僧統開講要義」に往生浄土に対する信願行の三法を具えて種々の行を修すべきであるという説示⁽²⁾、ならびに『阿弥陀經義疏』に一切の福業は正信回向願求がなければ往生の因とならないとする説示に基づき、元照が信願行三法を具えれば諸行が往生行となる⁽³⁾としていることを指摘している⁽⁴⁾。ところが、この先学による指摘は、元照が観想念仏や持名念佛以外の諸行による往生を認めるとしているにとどまり、いまだ何を根拠に元照が戒律を含む諸行によって往生で

きるとしているのか不明である。⁽⁵⁾特に、信願行の三法を具足すれば往生できるとする説は、元照以後、南宋の慈照子元や元代の普度、明代の雲棲株宏など、後代の中国浄土教者によって広く用いられているものの、考察がなされていない。⁽⁶⁾そこで、本稿では信願行三法具足を往生の条件とする諸行往生説の構成や淵源を考察し、元照における往生行の理解を明らかにしたい。

二 諸種の往生行

元照著作において、諸種の行業による往生浄土を説いている箇所は三つあり、『阿弥陀經義疏』の二箇所と「義天僧統開講要義」の一箇所である。

元照は『阿弥陀經義疏』に諸種の往生行を經典に基づいて列挙している。この多種の行業は、典拠となっているはずの經典の内容と合致しないものが多いことから、元照に先立って、多種の經典によって行業を挙げている慈雲遵式の「往生

正信偈」に依っている。⁽⁷⁾元照は、これらの行業すべてが衆生のために仏が用意した巧みな手立てであり、多種あつてもみな往生できる行であることを説いている。遵式「往生正信偈」との同異を考えるならば、観想念仏や称名念仏を中心としてまとめている遵式に対して、元照の場合は同じ行業が重なるのを避けて經典と行業を挙げている。例えば、『観経』や『無量寿経』の行業について遵式は「十念稱佛」や「十念即往生」などを挙げているが、元照は『観経』では「三福妙観」を挙げ、『無量寿経』では「十念往生」の説示に触れていないのである。これは、元照が『阿弥陀経』の経宗である持名にかぎらず、他の行業も往生の要因となるという明確な意思があつて、数種の行業を挙げたと推察されるのである。

同じく『阿弥陀経義疏』において元照は、『阿弥陀経』が持名念仏を往生の因となる多善根の行としており、布施・持戒・造像・坐禅・懺念などのあらゆる善行や福業を往生の因とならない少善根であると解釈している。ただし、ここで持名念仏以外のあらゆる行業が少善根で往生の因にならない理由として「正信廻向願求」がないことを挙げている。すなわち逆説的に考えれば、持名以外の一切の善行や福業が、「正信廻向願求」さえ具わっていれば往生の因となるとしているのである。この「正信廻向願求」について、戒度は「信」「願」と解釈し、阿弥陀仏の名号執持は、それらが必ず具足される

元照における諸種の往生行（吉 水）

から多善根となるのである、としている。元照『阿弥陀経義疏』に「或披經典、或遇知識聞必生信。信故持名」と、「信」があるからこそ持名念仏を行うのであると説いていることを勘案すれば、この戒度の解釈は妥当なものといえるだろう。元照が念仏を含むあらゆる行業に、「信」と「願」を具足させることで生因の行業になると考えていたことが想定されるのである。

そして、「義天僧統開講要義」において元照は、浄土の法門こそ衆生のたどるべき修行の道であり、『無量寿経』にいたっては仏法が滅尽しても百年は世に残ると説き、十方諸仏も極樂浄土を讃歎しており、その言葉は誠に信すべきものであると、浄土の法門を紹介している。その上で、この浄土の法門を修行するには、「信」「願」「行」の三法を具足すべきであるとしている。浄土の法門は「信」によって入り、「願」によって修行の道を進み、「行」によって往生を成し遂げるのであるから、浄土法門の修行には、この信願行の三法が必ず必要である。そのため、深き信心を發して、大誓願を立て、種々の行業を修すべきであると、元照は勧めているのである。元照の信願行の「行」は、「種種行」とされているとおり、あえて特別な行業を勧めず、浄土法門への「信」と浄土往生の「願」と結びついて行われる行業すべてが往生行となることを示しているのである。つまり、元照における諸行往生説は、信願行の三法が具足しさえすればよいというものであり、

元照における諸種の往生行（吉 水）

その意味においては持名の行も例外ではないのである。

三 信願行三法具足説の淵源

次に元照の信願行三法具足説の淵源についてみていきたい。元照以前に信願行三法具足説に近似する内容が智円『阿弥陀經疏』にみられる。智円は「信」「願」「浄業」を『阿弥陀經』の宗致とし、発願すれば浄土に生ずるといふ因と、菩提から退転しないといふ果の両義を宗要としている。その上で、『阿弥陀經』の正しく説かんとするところ、いわゆる宗致は、発願すれば浄土に生ずるといふ因についてであり、經に「若有^レ信者應^ニ當發願生^ニ彼國土^一」と示される「信」「願」、ならびに「聞^レ說^ニ阿彌陀佛^一執^ニ持名號^一乃至七日即得^ニ往生^一」と説かれる「浄業」であると述べている。元照の場合、『阿弥陀經』の經宗に「持名」のみを挙げている。しかし、元照においてこの「持名」は「信」「願」と無関係ではなく、この二つを具足して修されるものである。そのため、『阿弥陀經』の經宗に「信」「願」「浄業」を挙げる智円と、「持名」のみを挙げている元照と、表面的解釈は異なるものの、持名の行に対する実質的な取り扱いは同じといえるのである。また、智円と元照の「願」についての取り扱いをみていくと、両者が『阿弥陀經』の同一箇所を經証として、發願による往生を説いていることを看取することができる。このようなこ

とから、元照が智円の「信」「願」「浄業」の三種の具足を勧める説示を、形を変えて使用していることがうかがえる。具体的には、智円の「信」「願」「浄業」を具足して往生するといふ『阿弥陀經』の解釈を、元照は「信」「願」「行」の三法具足による往生説として、『阿弥陀經』に説かれる持名の行にかぎらず、他の行業に対しても援用しているのである。

ただし、智円説と元照説には「信」に関する見解において相違がみられる。智円には「信」に関する積極的な解釈はみられず、余り「信」を強調しなかったことが確認できる。それに対して元照は、釈尊が大悲をもつて丁寧に憐愍すべき衆生のために説き示されたのが浄土教であり、この浄土の法門においては能力の差異も出家の有無も修行の長短も造罪の軽重も関係なく、ただ決定の信心を往生の因とすると述べている。元照は智円と異なり、憐愍すべき衆生に対する理解の深まりから「願」だけでなく「信」についても明確に往生の因となることを明かしている。つまり、元照は「信」「願」のそれぞれを明確に往生の因と定め、「行」については智円のように「浄業」と限定しないことにより、より柔軟にあらゆる行業を往生行とする可能性を持たせているのである。

四 おわりに

以上、元照における諸種の往生行について、信願行三法具

足説を基軸として考察を行った。その結果は以下の3点にまとめることができる。

①元照は少なくとも『阿弥陀経義疏』執筆の時には、自身が『阿弥陀経』の経宗と定めた持名念仏以外にも、多種の往生行があることを示そうとする意図があった。

②元照は、『阿弥陀経』の「若有信者應當發願生彼國土」を経証としている智円『阿弥陀経疏』の経宗「信」「願」「浄業」を援用して、信願行三法を具足するという往生行の原則を説いている。

③元照の考える往生行は、単一の行業に特化するのではなく、浄土教にさまざまな入口があることを示そうとしたものである。それは特に、元照自身が生涯研究と研鑽を重ねた持戒について、解脱のためでありながらも、臨終の時には往生浄土への大切な行業となることを明かす必要性があったことに依ると推察される。そして、元照は信願行の三法を具足することこそ、持戒を含むすべての往生行に共通する因であると位置づけている⁽⁹⁾。

(紙面の都合上、詳細な検討は別稿に譲りたい)

1 佐藤成順氏『宋代仏教の研究―元照の浄土教―』二四一頁に、「授大菩薩戒儀」における授戒の目的が往生浄土にあることが指摘されている。

元照における諸種の往生行(吉 水)

2 『卍統蔵』五九・六四五頁a。

3 『大正蔵』三七・三六一頁c。

4 元照の諸行往生に関して触れている研究は多数ある。しかし、どの研究も信・願・行三法具足を条件として、諸行が往生行となるという元照の思想をとりあげるも、詳しい考察はなされていない。

5 ここでは「諸行」を先学と同じく「念仏以外の行」というように使用した。

6 「信願行」について触れている研究には、望月信亨氏『中国浄土教理史』、荒木見悟氏『雲棲株宏の研究』、岩城英規氏「雲棲株宏の阿弥陀経解釈―信・願・行の三資糧を中心に―」(『印仏研』四四―一―所収)がある。しかし、これらは慈照子元や雲棲株宏を中心としたものであり、わずかに岩城氏によって信願行三資糧の説の淵源が元照にあると述べられているにとどまる。

7 『阿弥陀経義疏』に挙げる經典は、『陀羅尼集経』以外すべて導式「往生正信偈」(『天竺別集』所収、『卍統蔵』五七・三四頁c)にみられる。

8 『大正蔵』三七・三六一頁c。

9 元照の往生行の理解については、さらに三福九品の行業や持戒と信願行三法具足説がいかに結びつくかの考察が不可欠なものである。しかし、本稿では紙数の都合上これらの考察は割愛した。

〈キーワード〉 元照、信願行三資糧、諸行往生、「義天僧統開講要義」、『阿弥陀経義疏』

(大正大学総合佛教研究所研究員)